

みやぎ街道交流会

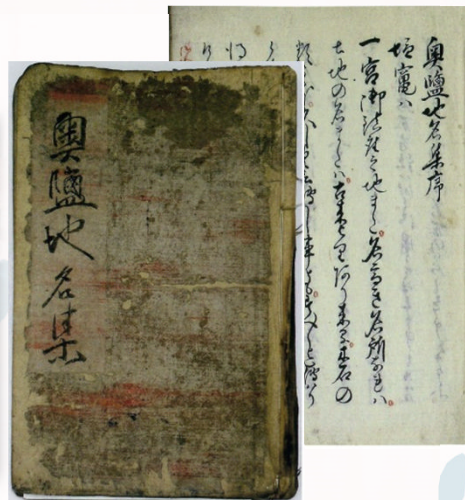
震災復興支援フォーラム

『奥鹽地名集』講演会 & 観月舟

報告書



瑞巖寺・陽徳院山門



『奥鹽地名集』（『新釈 奥鹽地名集』より）



松島の名月（撮影/京野）

日時 平成23年10月10日(月:体育の日) 午後1時30分より

会場 第Ⅰ部 瑞巖寺・陽徳院(松島町)

第Ⅱ部 松島湾クルージング

主催 みやぎ街道交流会

共催 多賀城市史跡案内サークル

特定非営利活動法人NPOみなとしほがま ・ おくの細道松島海道

協力 瑞巖寺

プログラム

まちづくり・地域づくりには、その土地の歴史や伝統文化を踏まえた対応が求められますが、東日本大震災の復旧・復興においても同様です。

江戸時代の塩竈を代表する地誌である『奥鹽（おうえん）地名集』からは、塩竈だけではなく、隣接する多賀城及び松島も含めて、学ぶべきことが多いものと思われます。

【第Ⅰ部】 [13:30~17:00]

※ 開会に先立ち、東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りして黙祷を捧げました。

◇ オープニング・セレモニー

主催者挨拶 みやぎ街道交流会 会長 白鳥 良一

◇ 基調講演 [13:40~15:10]

～東日本大震災復興にあたり～

「『奥鹽地名集』から見た多賀城～塩竈～松島」

講師／ 斎藤 善之 氏（東北学院大学経営学部教授）

斎藤善之教授は、特定非営利活動法人「NPOみなとしほがま」古文書部会 部会長として、長年にわたり部会を指導されてきました。

（休憩 10分）

◇ フォーラム [15:20~16:20]

「『奥鹽地名集』から何を学び・どう活かすか」

『新釈奥鹽地名集』の解説・出版に関わった「NPOみなとしほがま」古文書部会の関係者に“その苦勞、新たに得られた知見及び震災復旧・復興にどう活かすべきか”などについて語り合っていました。

コーディネーター 大橋 光雄 氏（多賀城市史跡案内サークル 副会長）

パネラー 鈴木 和榮 氏（ボランティアガイドの会 部会長 ※）

高橋 幸三郎 氏（歴史的建造物保存活用部会 部会長 ※）

三浦 一泰 氏（岩蔵部会 部会長 ※）

アドバイザー 斎藤 善之 氏（東北学院大学経営学部 教授）

※ NPO法人「NPOみなとしほがま」の部会です。

◇ 主催・共催団体の紹介 [16:35~16:45]

今回のフォーラムの主催・共催の各団体から、活動概要などを紹介していただきました。

◇ 瑞巖寺「平成の大修理」の概況 [16:45~17:00]

現在、瑞巖寺本堂は「平成の大修理」中ですが、10月1及び2日に松島町教育委員会・宮城県文化財保護課により行われた現地説明会の状況について、これに参加した「おくの細道松島海道」代表京野英一氏から報告していただきました。

【第Ⅱ部】 [17:15（乗船） 17:30（出航）～19:00（下船）]

◇ 観月舟（海道談義）

当日（10月10日）は“陰暦九月十三夜”にあたり、一年中で最も松島の月が魅力的な日（仙台藩年中行事）とされています。地元松島町で活動する「おくの細道松島海道」が例年開催している松島湾観月クルージングを、今回はみやぎ街道交流会恒例の海道談義（交流会）として開催しました。（月見御膳弁当と月見酒付き）

【陽徳院】について

藩祖政宗公の正室・陽徳院（愛姫）の廟所を護る香華院（菩提寺）で、二代藩主・忠宗公が母生前の修養道場として、瑞巖寺「三代開山」として著名な雲居禅師により開山に迎え、慶安3年（1650）に開創（造営）したものです。現在は、臨濟宗の専門道場になっており、通常は一般者の参拝はされていません。

主催者あいさつ

みやぎ街道交流会 会長 白鳥良一

本日は、今回の東日本大震災の復興に向けたみやぎ街道交流会の活動の一環として、被災地でもある多賀城・塩竈・松島で活動する団体との共催により、江戸時代の塩竈を代表する地誌である『奥鹽（おうえん）地名集』を題材に”震災復興支援フォーラム”を開催致しましたところ、ご多様中にもかかわらず、多くの方々にご参加いただきまして、誠に有り難うございます。



本日のフォーラムでは、先ず「NPOみなとしほがま」古文書部会の皆様とともに『奥鹽地名集』の解説にあたられました東北学院大学教授の斎藤善之先生から、“東日本大震災復興にあたり『奥鹽地名集』から見た多賀城～塩竈～松島”というテーマで基調講演をいただきます。その後、それを踏まえて、「奥鹽地名集」を解説し、平成版の「奥鹽地名集」とも言うべき、素晴らしい内容の「新釈 奥鹽地名集」を出版された「NPOみなとしほがま」古文書部会の関係者に“その労苦とか、得られた知見、更にそれを震災復興にどう活かすべきか”などについて、斎藤先生と共に語り合ってください。

「みやぎ街道交流会」は、宮城の豊かな自然・文化・風土などの地域資源を街道や舟運で結ぶことによって、交流と連携を促進し、心豊かで誇りある宮城の地域づくりに貢献することを目的に、活動を行っている団体でございます。4年前の平成19年に、今回の津波で壊滅的な被害を受けた、松島湾の寒風沢島で産声を上げました。

これまでの主な活動といたしましては、県内各地で交流大会や、講演会、勉強会を継続的に開催するなどの活動を行っており、平成19年秋に開催した栗原を皮切りに仙台、白石それから加美で、交流大会などを開催して参りました。また、街道の調査や保存活動も大きな事業の一つで、これまでに栗原や一関での奥州街道の調査や刈り払い、また、大衡では失われてしまう奥州街道の記録保存調査などを行っております。さらに、情報発信、活動支援事業として、交流会ニュースの発行や各地の活動イベント等の紹介、またそのような活動を行っている団体への支援なども行っています。

ところで、すぐれたまちづくりや地域づくりを行うには、その土地の歴史・伝統文化を踏まえることが、とても大切な要素であります。

多賀城・塩竈・松島は、多賀城跡、塩竈神社及び瑞巖寺を中心とした町ということで全国に知れ渡っている所であり、その歴史を紐解いてみますと、それぞれが密接な関係で存在していたことが知られています。

すなわち、個々に点として存在するのではなく、時間軸で結ばれた縦線と、それからそれぞれの時代の面的な広がりなどが密接な関わりを持ちながら存在してきたということが出来ます。そのような観点から、このフォーラムの開催を通じて、お互いの情報を共有し、3つの地域がさらに交流・連携して、歴史や伝統文化の魅力を探り、今に活かし、さらに後世に伝えていければ、とても素晴らしい事ではないかと思えます。

そして、この未曾有の大災害からの復旧・復興に向けて、歴史と伝統文化を活かした活動が、更に大きく広がることを期待したいと思います。

本日は“陰暦の九月十三日”にあたり、仙台藩ではこの夜、年中行事として月見の宴が催されたと聞いております。交流会を行った際は、街道談義（懇親会）が恒例になってはいますが、今回は月見舟に乗って、古人の風情を偲びながら格調高く行いたいと思っております。天気も良さそうですし、スタッフもいつも以上に嗜好を凝らしているようですので、ご参加の皆様には大いにご満足していただけるのではないかと思います。

はじめに

東北学院大学の斎藤と申します。今日は大変に立派な会場でお話をさせていただけるということで、大変に光栄に思っております。



これまで、みやぎ街道交流会の活動に関心をもっておりまして、今日はこのような形でお呼びいただきまして、大変嬉しく思っているところです。また、“多賀城史跡案内サークル”、“おくの細道松島海道”と私も“NPO みなとしほがま”のメンバーとして、連携した形で活動や交流が深まるということは大変意義のあることだなと感じている所です。

今日は、私どもの“NPO みなとしほがま”の活動の成果である『奥鹽地名集』（おうえんちめいしゅう）を紐解いた中から出てくる、この地域の交流のあり方ということでお話しさせていただこうかと思ひます。

この話があった時に“『奥鹽地名集』から見た多賀城～塩竈～松島”というタイトルを頂きまして、しばし『奥鹽地名集』を眺めながら、どう話しをつくらうかと考えましたけれども、そう考えてみれば『奥鹽地名集』はそういう風にも読めるなということで、今日の話しを構成してみました。

この『奥鹽地名集』を取り上げたきっかけは、歴史や文化を活かしたまちづくりとして、港町の歴史をやっつけようと、私や今日フォーラムに参加する皆さんを含めて話し合いをして、2003年12月、当時の三升市長さんに理事長をお願いして、“NPO みなとしほがま”を設立しました。そして、翌年7月には古文書部会が、いくつかの部会の1つとして発足しました。部会長が私ということで、最初のテキストとして選ば



『奥鹽地名集』表紙

せていただいたのが『奥鹽地名集』でした。

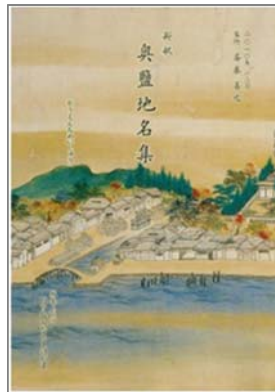
毎週1回夜7時頃、集まって勉強会を始め、『奥鹽地名集』を少しずつ読んでとは繰り返す、ようやく読み書きを終わり、それぞれ書かれている中身についても現地確認等をして、それをまとめて2010年12月に『新釈奥鹽地名集』という形で刊行させて頂きました。

通算230回目となっていますが、これは、大震災後1ヶ月半～2ヶ月ほど中断があった

けれど、また再開し、現在もなお続いており、もう少し増えています。

先ず、『奥鹽地名集』というのは何なのかなということです。原本の写真を見ると、一寸焦げ目が付いてい

ます。所蔵者の阿部勘酒造店が火災にあった時に火中から救い出されそうです。それがわかる焦げ目の跡が角のところに付いています。先人達が大変な思いをして残してくれた唯一これしかない一点物の史料です。



『新釈奥鹽地名集』表紙

『新釈奥鹽地名集』表紙のくりに使われているのは、塩竈ゆかりの鹽竈神社に保存されている江戸時代中頃の塩竈を描いた絵を使用しています。ちょうど時代も合っており、美術品としても優れたものです。

この本の中身は、第一部と第二部に分けまして、第一部は上半分に『奥鹽地名集』の写真を、下半分には活字起こしを対照して載せています。第二部は現代語訳と解説ということで、最初に現代語に翻刻したもの、それに続く部分は、中のいくつかの言葉について取り上げて、1つひとつ解説を加え、関係する写真なども掲載するという構成でつくった本です。

1 奥鹽地名集について

『奥鹽地名集』は、塩竈の造酒屋阿部勘九郎家に伝わり、現在は塩竈市民図書館（タイムシップ塩竈）で保管、展示されています。

作者は、鈴木三郎治宜見（さぶろうじよしちか）です。寛保9年（1741）生まれで、鈴木家は鹽竈神社社家の御釜大夫鈴木家から分家した現在の鈴木順平家（本町の鈴木はきもの店）です。宜見は7代目で、神谷沢村（利府町）から来た養子ですが、鈴木家の家運を復興して「再興の祖」といわれ、また検断役（町役人）を勤めて町政に携わり「検断の三郎治」とも呼ばれていました。

宜見は、相当な蔵書を蓄え、和算にも通じていたとされ、その技能をもって塩竈の水道や土木工事などの事業にも貢献したといひます。ちなみに、安永六（1777）年に塩竈町中に木樋の水道を敷設した鈴木勘右衛門は、宜見の親類筋にあたり、宜見は勘右衛門に協力して、設計や監督に携わったということです。検断を50歳で引退した後は、眼鏡も杖も使わず、俳諧・狂歌と菜園作りを楽しむなどして「塩竈の奇老」と呼ばれていました。『奥鹽地名集』の刊行は宜見52歳にあたり、検断を辞して2年後のことになります。

文政2年（1819）に塩竈で刊行された歌集『舟中一覽』に「七十九老よしちか」の名で、“うれしさは ねられぬまゝに 秋の夜の 老のねさめの 在明の月”なる歌が掲載されています。鈴木家に残る位牌によれば、文政3（1820）年9月27日に80歳で没。宜見の法名は算学宜見居士（さんがくぎけんこじ）です。

書誌的位置は、奥州塩竈の地名にまつわる地誌集成となりますが、江戸時代中期の塩竈の地誌です。この頃、

江戸名所図会など地誌ブームが起きていました。

塩竈市史でも「地元の人でなければ記しえない興味深い記事に富んでいる。塩竈の歴史、地理を研究する者にとっては、極めて貴重な文献といわなければならない」としており、まさしく、塩竈学の始まりともいえる文献です。塩竈・松島には中世から多くの紀行文的な文学作品があるけれど、それはあくまでも外からやって来た人達が見て、聞いて紀行文という形で書いたもので、『奥鹽地名集』（以下「本書」という）については、地元に住んでいて初めて書いたものであることに我々は大きな関心を向けました。そして、外からやって来た人のものとの対比もしました。

2 内容構成(目次)

目次の順は、官が編纂すると役所からですが、最後に役所になっていることに特徴があります。(目次は略)

3 塩竈から多賀城・仙台へ

塩竈は、中心部が入り江に面し、周りは丘陵地や高台に囲まれており、仙台や松島などへ出かけていくには、どこから出ても坂を越えていくといわれており、先ず坂を取り上げてみました。

本書では、「一 杉坂 表御坂をいう。長さ四十三間、幅一丈一尺である。石階段が中段まで五十六段、中段より上は百三十六段ある…。一 裏坂 法蓮寺からの御山への通路である。この場所より眼下は、町屋が見え渡り、当浦海上から金華山まで見晴らしのよいと所である。一 七曲り坂 影向石の上。一 白坂 御釜の前より雲上、慈雲両寺への通路である。一 赤坂 仙台海道大日向。一 前坂 藤倉堤の上。一 鬼木坂 吉津の鬼木に入る道。」とあります。本書は、詳しいところもあれば、簡潔なところもあり、対比が面白いといえます。

(参詣道)

先ずは鹽竈神社の3つの参詣道に我々なりにもう少し解説してみました。

*** 杉坂** 鹽竈神社の表坂の別称で、御坂とも男坂ともいいます。長さ43間(77m余)、幅1丈1尺(3m余)であり、本書ではこの階段を192段としていますが、現在は202段あり、10段ほど増えています。



表坂(ブリュネ画)

戊辰戦争の際、フランス軍事顧問団の副隊長として榎本艦隊とともに塩竈を訪れた砲兵大尉ジュール・ブリュネが描いた表坂の絵が残されていますが、それによれば、現在は階段になっている最下段の部分が斜面になっており、それが10段の階段となったとすると、現在の202段になるといわれます。

ブリュネの絵を見ると、手前の町屋のところは別と

して、景観は変わっていないことに驚きます。

*** 裏坂** 宮町・門前町から鹽竈神社の裏下馬に通じる参道で、古くは法蓮寺の社僧が鹽竈神社へ通うための小径であったといわれます。『塩竈村風土記御用書出』には「黒門下、御裏坂、長二百間(360m)程、



裏坂入口(宮町) 絵葉書[個人蔵]

法蓮寺御門前より御裏下馬への通路」とあります。明治になって石段の整備がなされ、庶民の神社参詣道として活用されるように

なりました。ちなみに石段は表坂と同じ202段です。

裏坂の登り口付近に「鹽竈神社道路改修工事記念碑」(通称「裏坂改修碑」)があります。それには「参道拡張賛成者建立、明治42(1909)年10月10日」とあり、裏坂がこの頃、地元有志らによって改修されたことがわかります。その碑文によれば、裏坂は、元、町家の間から登る小道であったが、他の参詣道の2道(表坂・七曲り坂)が急で遠いのに比べ、近くて緩やかであり、参詣に便利だとして、文政天保の頃(1818~1843)、仙台の豪商中井新三郎らが計画して岩を掘削し坂道を補修したところ、この道を通る参拝客が増えたそうです。

明治19(1886)年、鉄道が開通し停車場が本町の東に設置されると、さらに駅からの利用者が増えたが、この坂は入口がなお狭くて通りにくかったので、宮司水沼氏が改修を発起し、仙台の角田専治、塩竈町の及川仙兵衛、さらに氏子総代の人々の賛同を得て改修事業に着手し、明治41(1908)年の皇太子殿下参拝記念にあわせて竣工しました。かつての坂道は道幅わずか2間(3.6m)、石階の幅は1間半(2.7m)であったが、改修後は道幅6間(11m)、石階は4、5間に拡がり、道路は平坦になり、石垣下には水堀暗渠などを設け、大小の石燈銅燈5対も設置されました。このために民有地を買収するなど金7千円を要したが、これらはすべて有志の献金で行われました。とりわけ仙台の大内源太右衛門は大石鳥居を献上して、この事業を支援しました。これにより、この一帯は整備され、ひとしお



七曲り坂(一森山)

の風趣を備えるようになったといえます。

表坂は御神輿が通り、官の力で整備されたと思いますが、裏坂は民間の金を集めて整備された道という性格を持っています。

*** 七曲り坂** 表坂を男坂、裏坂を女坂とすると、七曲り坂は婆坂とも地元ではいわれています。鹽竈神社の参道のなかでも最

古のものとされ、今なお古道の趣を残しています。坂下の江尻は、その名および地形的特徴から、かつての入江の終端の跡とみられます。また坂の途中にはわき水の湧出があり「金花水」と呼ばれて参詣者に親しまれていたが、今は使われていません。

(白坂・赤坂)

以上3つが参詣道ですが、塩竈から出ていく坂道として、白坂と赤坂があります。

*** 白坂** 南町にあり、坂道は塩竈石と呼ばれる白っぽい凝灰岩の岩盤の上にあり、これが白坂の名の由来になったといえます。(塩竈と呼ばれるのは中世ぐらいからで、)古くは国府津(国府の港の意味。塩竈津)から国府多賀城へ通じる古道とされ、白坂観音堂の背後の高台には国府津(こうづ)町いわゆる「香津千軒」があったとの伝承があります。江戸時代になると、御釜社脇の雲上寺への坂道も含めて白坂と称するようになります。



古道の趣を残す白坂(南町)

「塩竈村風土記御用書出」によれば、塩竈で唯一の「代数有之御百姓」(歴史のある御百姓)であった「白坂屋敷・新(斎)藤八郎右衛門」もここにあった。地元の伝承では、現在の石母田医院跡の場所が、かつて白坂屋

斎藤八郎右衛門の屋敷跡で、白坂屋は塩竈最古の造酒屋であったといえます。この斎藤家の祖先は、古く留守氏の時代にまで遡り、留守家の舟奉行を勤めた斎藤若狭守であったといい、江戸時代には、武士から町人となり、その後、白坂で貞享年間(1684~)から享保年間(1716~)まで鹽竈神社の御神酒屋を勤めていたといえます。「塩釜町方留書」によれば、元文2(1737)年2月に「南町(鈴木)勘左衛門所持仕り候無高白坂屋敷、御村吟味の上、右勘左衛門方より、所望仕貴寺(慈雲寺)様へ境内に、御村より永代地に差上げ申し候」とあり、この時、南町の鈴木勘左衛門が所有していた無高(税金免除)の「白坂屋敷」を、慈雲寺の要望に応じて、村中から境内地として寄進したことがわかります。

また、宝暦10(1760)年2月16日付で、鹽竈神社振興のため操芝居の興行を求めた検断肝入らの願書が「大肝入千賀山三郎」宛に出されており、この千賀家が居住していたのも白坂であったといえます。

この様に白坂は肝入りなどが住んでいて、大変古い地名の一角でした。これが近代になるとお医者さんが多く住んでいて、白衣の白坂とも思われている人もいます。

*** 赤坂** 旧赤坂橋(現赤坂交差点)から大日向町に抜ける坂道。江戸時代になってから開かれた新道とされ、雨が降ると赤土のぬかるみになったこと、そして白坂との対比から赤坂と呼ばれるようになったといえます。長さは25間(45m)で、塩竈町の入口には、目印として一対の燈籠が置かれていたそうです。



赤坂(昭和5年)
(『塩竈市史・資料篇Ⅱ』口絵)

江戸時代、塩竈港で水揚げされた五十集(いさば)(海産物)は仙台北下に運ばれたが、これを運んだ駄ん子馬はこの坂を盛んに往来し、この馬方を化かす赤坂狐の伝説が語られていました。また坂の途中には茶屋があり、その付近

には馬を祀った馬頭観音もあったといえます。

ここにはかつて菓子舗の丹野屋五郎兵衛もあったことが知られています。丹野屋は丹六園といい、今は宮町角の古い佇まいの菓子舗ですが、徐々に町場に移って来て、今の所に移った時は五十集屋を営んでいたが、戦後に菓子舗に戻ったということです。

ちなみに、馬頭観音は、本来宗教的には違う様ですが、なぜか馬の頭が頭に付いた観音ということで、馬方に非常に信仰され、馬方道に多く祀られており、長いこと馬を使って商売をすることから馬方と馬の間は親しく、死んだ馬を祀ったということが考えられます。

*** 鳥井原** 多賀城から塩竈を結ぶ古道の途中、泉ヶ丘にあり、現在の宮城県塩釜高等学校の校庭の辺りとされます。また、鳥井原から南への道として、野田の玉川の旧跡から多賀城への古道があり、上道と下道の2本で多賀城と結ばれています。

「塩竈村風土記御用書出」(『宮城県史24』300頁)によれば、「神代の折、鳥居あい立ち候場所と申し伝え、今に上古の鳥居の由、岩石残り候」とあります。その石材は5本あり、その周囲はいずれも4、5尺(120cm~150cm)。長さは、それぞれ7尺9寸(2.4m)が1本、7尺6寸(2.3m)が1本、5尺8寸(1.8m)が2本、3尺8寸(1.2m)が1本であったといえます。「塩釜町方留書」(『塩竈市史・資料篇』10頁)によれば、「鳥井原。但、御宮より南に当り、畑の内に岩の鳥井石有り」とあります。また一説には「鳥井原。但、一宮鳥井の由にて、大肝入邊見次右衛門畑の内に鳥井石、岩石にて2本あり、かさ石の由にて、御百姓佐左衛門が畑の内に1本ござ候」(『塩竈市史・資料篇』52頁)とあり、いずれも当時、鳥居らしき石が畑の中に見えていたことを記しています。

(道)

本書には、道という項目があります。

*** 道** 本書には「道 - 仙台への道 御城へ五里、原町へ三里半、七北田へ三里半、壺の碑へ一里十町、 - 松島への道 松島へ二里十九町、海上は二里二十九町、高城町へ三里二町。(略) - 大代への道。(略) - 八幡村への道。(略) - 利府町への道。(略)」として、地域名とその里数が記されており、当時の塩竈の人々の周辺地域への目標となる場所がどこなのか。地理感覚、狭い意味での世界観、地域感がうかがえます。しかし、記されたそれぞれの

里数が、塩竈のどこを起点としたものかは、定かではありません。

鹽竈神社表坂の向かいの崖下（西町）に「奏社の宮・多賀城の碑・野田の玉川・沖の井・末の松山」への里数を記した石碑があります。また、明治9（1876）年に内務省によって設置された「高低測量記号」（いわゆる水準点）として、塩竈では「小島田ノ内小黒崎」および「杉坂町一ノ宮常夜燈臺石」の2ヶ所にあつたとされます（「官省使文章」明治10年条・宮城県公文書館蔵）。そのうち、前者は所在不明で、後者は御神馬社から東門に向かうに中間地点に移設されています。



塩竈街道（案内付近 仙台市宮城野区）
（『仙台市史・特別編4』523頁）

*** 御城へ** 塩竈から仙台下へは当時、市川橋～南宮～岩切～今市～燕沢～原町を經由する道が一般的でした。塩竈に水揚げされた五十集も、馬の背に積まれて仙台まで運ばれた。したがってこの道は「肴の道」でもあった（『肴の路・古文書からみた塩竈』）。

なお、このルートは我々で既に調査済みです。

*** 原町** 仙台市宮城野区にあり、仙台北

下町の東端にあたります。正式にいうと城下ではなく、城下が街道に沿って延びて自然発生的に出来た町ようです。「丁切」（ちょうぎり）（または丁切根（ちょうぎんね））と呼ばれた木戸（一種の関門）が設けられ、往來する人馬を監視しました。

なお、塩竈から仙台に向かう五十集荷物は、ここ原町で馬を付け替えること（継送り）が定められていましたが、荷物が痛むこと、駄賃代が高むことなどから、浜方の生産者荷主らはこれを嫌い、寛政6（1794）年、原町で継送りせず直送したいと藩に訴えました。これに対して藩は、原町の継送りは廃止するかわりに口銭徴収を認めるという裁定を出しましたが、原町の衰退が著しくなり翌年には継送りを復活させました。

このように、原町は塩竈と仙台を結ぶ街道の重要拠点になっていました。

（波よけの石）

今日のテーマの関係で、津波と関わりそうなものとして、波よけ石があります。

*** 波よけの石** 本書によれば、御釜社境内にあり、梵字が刻まれていたといえます。しかし、現在、梵字の刻まれた石はありません。

また、「塩松勝譜」（『塩竈市史・資料篇』467頁）によれば「防波石。御釜祠ノ側ニアリ。七神石ノ一ニシテ（中略）相伝フ、神、鹽ヲ煮ルノ日、洪波時々民家ニ侵入ス。神之ヲ病ヒ、此石ヲ以テ水涯（害か）ヲ鎮シ、祝シテ曰ク、今ヨリ而後、浪波永ク此石ヲ踰ル

勿レト。後絶テ其患ナシト云フ」とあります。すなわち、神が塩を煮た時、洪水が起って民家に侵入したので、神がこの石をもって水害を鎮め、以後いかなる波もこの石を越えることはないとし、その通りになったといえます。

ところで、御釜社の近くの白坂（南町）の途中に、梵字らしき文字が刻まれた石碑があつたことが、昭和33（1958）年頃の写真からわかります。子細に見ると石碑の表面中央に、かすかに梵字らしきものが見えています。そうなるこの写真の石こそ、諸書にいう



「八尺堂之址」の石碑（御釜社境内）

波よけの石ということになります。しかし、現在は写真の場所にはこの石はありません。

一方、この石と外観がほとんど同一の石碑が御釜社境内に現存します。「八尺堂之址」の碑がそれで、石碑の頭部があたかも波頭の形のように、波よけ石にふさわしい石ともいえます。地元の伝承では、この石碑はもとは白坂にあつた

が、その地の所有者で鹽竈神社の社家であつた長田家の意向により、志賀石材店が御釜神社に移転させたといえます。その時期は不明ですが、これらの事情からみて、この「八尺堂之址」の石碑こそは、かつて白坂にあつた梵字の刻まれた石であり、波よけの石とみてよいと思います。ただし、現在、御釜社にある石碑には梵字がみられず「八尺堂之址」なる文字が彫り込まれています。その事情については地元にも知る者がいませんが、おそらく石碑の移転とも関わって、梵字の刻まれた表面が削られ、そこに「八尺堂之址」なる新たな文字が彫り込まれたとみられます。

ちなみに、「八尺堂」とは、江戸時代中期に塩竈を訪れた行脚俳人の遅月庵空阿（ちげつあんくうあ）が、御釜社境内に建てて住んだ庵「槻陰舎」（つきかげしゃ）のこととされ、方8尺（9尺ともされる。8尺は2.4m）であつたことからそう呼ばれたといえます。空阿は、寛政元（1789）年11月26日から同3（1791）年5月まで塩竈に滞在し、その間この庵に住んだといえます。「八尺堂之址」とは、この故事を記念して彫り込まれたものとみられます。

今回、「八尺堂之址」ところまで津波はきたが、ほぼそこで止まりました。

4 塩竈から松島へ

*** 松島へ** 当時、陸の道はあるけれど、舟でいくのが常識でした。

塩竈には当時、松島への遊覧客を運ぶ茶船がありました。塩竈では茶船水主（かこ）（茶船業者）といい、30軒ほどありました。当初は新屋敷の者たちが年に

30貫文の運上金を藩に納めるのと引きかえに御用船（藩船）と賃船（運賃営業船）を独占してきました。ところが、寛政4（1792）年、藩主が初入部したこともあり、9月の鹽竈神社祭礼が前代未聞の人出となり、その際の茶船の不足と運賃の高騰が甚だしかったため、翌年からは、茶船は新屋敷組、南町組、門前町組の3組に編成替えされ、運上金も年に80貫文に改められました（『塩竈市史・本篇Ⅰ』233頁）。

「塩釜町方留書」（『塩竈市史・資料篇』139頁）によれば「塩竈より松島へ運賃の定これ無く候故、前々より旅人の分は相対にて取来り候處、元文四（1739）年、高間伝兵衛、塩竈松島へあい下られ候節は、船賃二百五十文下し置かれ候。縦（たとえ）は茶船一艘水主四人乗に候えば、船の分五十文、水主分二百文、但、一人五十文の積り」とあり、塩竈から松島への茶船については公定運賃はなく、その場の交渉で決められていたことがわかり、元文頃の運賃相場として一艘250文で、茶船は水主4人乗りであったといえます。



「奥州名所尽集」(仙台市博物館蔵)

水主4人乗りは四挺艦（4人漕ぎ）といい、一番大きいのが八挺艦で許可された人しか持てません。普通は最大でも六挺艦で、その次は四挺艦ですから、漕ぎ型の舟ではそれなりに大きめの舟です。帆も備え付けられていたが補助的なもので、手で漕ぐものであったと思います。

*** 大河岸町**

当時は大河岸町が発着場で、今はこの町名はなく、本町のうちにあたります。下本町との境を南端とし、新河岸町の境となる常盤橋（通称太田屋橋、往時は大河岸土橋）を北端とする片側町で、東側は海面（船着場）でした。



大河岸町と南新町(明治10年代)[個人蔵]

宝永年間（1704～）にこの場所に埋立て地が造成され、それに伴って当町も形成されました。この時に築造された突堤は、明治初年の埋立てで消滅するまで江戸時代を通して存続し、塩竈の港町の象徴的存在になっていました。

町の長さは1丁24間（153m）でした。明和年間（1764～）の軒数は26軒で、そのうち17軒が町役負担（うち2軒が1軒屋敷、15軒が半軒屋敷）、残り9軒は町役免除でした。

*** 御腰かけ石**

御腰かけ石という名石があります。本書では、この石は祓ヶ崎の海中にあった石とされま

す。「塩竈村風土記御用書出」（『宮城縣史24』311頁）には「祓崎下、御腰掛石。竪二尺（66cm）・横二尺。右は祓崎の海中にこれ在り、地面より八寸（24cm）程頭出、形円き石にござ候。潮満ち候節はあい見え申さず候。一宮大明神、天降り給い候節、御腰懸けられ候石の由申し伝え候事」とあり、海中にあって神が腰掛けた石であったといわれます。一方、「奥州名所図会」によれば、そこには「かこうりんうりん石」（降臨石）と呼ばれる石があります。その解説には「上古、明神始て海潮を煮の地をたま見玉ふ所なり。今河岸町を行ぬけて、尾嶋へ廻る海崖の水中に一巨石あり」とあります。

このように諸説あるものの、いずれにしてもここにあった石は明治以後、入江の埋め立てが進むとそのま埋められてしまったらしいです。石があった場所を買った海岸通の小松寿右衛門氏の宅地になり、小松家では庭の土中に埋もれているという石の息継ぎのために節抜き竹を地中に挿し、当主が常にこれを拝していたといえます。

*** 七曲り水戸** 沖から大河岸までの七つのところで曲がっている水道（みずみち）をいい、七曲り坂と対比させているのでしょうか。七曲り水戸にも、神様が関わっています。

本書では「（略）。右の七曲り水戸は、別宮の御神が踏み分けさせられた水戸と申し伝えている。先年、



塩竈の津と水道 小池曲江「塩竈松島図巻」[東北歴史博物館蔵]

新河岸の川通りから水道を真っ直ぐにすべきかどうかと、村で相談したことがあったが、曲がり目曲がり目の浜々に、洪水で押し出し出した土砂が溜まるのを浚い上げれば、遠沖までは埋まらないところを、水道を真っ直ぐにすると、押し出した土砂が、遠沖の一の棒杭あたりまで流れてしまい、これを浚い上げる手だてがなくなり、そうなれば神が踏み分けさせられた七曲りの名も途絶えてしまい、よろしくないとして、水戸を真っ直ぐにすることは取りやめとなった。このようなことは後々へ申し伝えていくべきことである。」ということで、開発と保存が当時も問題となり、効率性を求めて水路をまっすぐに付け替えようということがあったけれど、神が踏み分けたのだといいながらも、土砂の滞留の効果を考えて開削は取り止めようという江戸時代の決定であります。

現在の海岸通・港町一丁目・貞山一丁目と、対岸の北浜四丁目・新浜一丁目の間の海にあった水路（航路）です。

当時の塩竈港を描いた「勝画楼望月」によれば、沖

まで続く水戸柱（濡標（みおつくし）。航路標識として水中に設置された棒杭）が屈曲して続いています。このように七曲り水戸は、当時の塩竈を象徴する景観であったことがわかります。

「鹽社史料」によれば「塩竈水戸の儀は、諸廻船通用、並びに屋形様・御外人様御渡海、そのほか一宮御用御材木蔵の通用、或は御石大豆御積立、松島そのほか諸御用船夫通用、五十集船着岸」とあり、この水戸を様々な船が出入していたことがわかります。安永年間（1772～）の「塩竈村風土記御用書出」（『宮城縣史24』299頁）には、天当舟1艘、団平舟8艘、小晒舟2艘、さつは舟（早波船）13艘、茶船28艘、小茶船6艘、かつこ（船）13艘があったことが記されています。

***水道** 遠浅の海で川の水が海にぬける水路で、漣筋などともいいます。「明治5（1872）年付・塩竈港浚いの御願書」（丹野六右衛門家文書）によれば、千賀の浦はもともと遠浅で、土砂が溜まりやすく船の出入りに支障がありました。そこで、船の通行を維持するために、水路にたまった土砂の浚渫、すなわち水戸払いが定期的に行われました。それでも千石船（江戸時代を代表する大型商船で、米千石＝150t積み）は、一番杭（高崖前・現在の魚市場前）辺りまでしか入れず、そこからは茶船や伝馬船に荷を積み替えて大河岸前まで運んでいたといえます。

藩政時代の水戸払いは、のべ人工数4,737人で行われたが、そのうちの3分の1を塩竈町が、残りの3分の2を宮城郡中が負担することになっていました。

しかし、戊辰戦争前後からは、政治的混乱によりこうした水戸払いもできなくなり、明治初年には水道に土砂が溜まって、船の入港が困難になりました。そのため港湾関連業者には廃業する者も多く出て、塩竈はすっかり衰退してしまったということです。そこで、明治5（1872）年、関係者から明治新政府に対し水戸払いの願いが出されたのです。

それ以後も塩竈港の浚渫事業は、近代港湾整備の中心課題として、引き継がれていくことになるのです。

***一の棒杭** 七曲り水戸（濡）に沿って設置された水戸柱（濡標）のうち、最も沖合にあった柱（杭）をいいます。ここから大河岸近くの七の棒杭まであったとされます。

「塩釜町方留書」（『塩竈市史・資料篇』90頁）によれば「水戸柱百本余、かし前より押ちらし迄、左右朽折れ次第、願い申すべき事」とあり、水戸柱は100本余りあり、破損の際は藩に願い出れば資材が支給されたことがわかります。

***釜ヶ淵** 新浜町三丁目の東北区水産研究所の地先の海面をいいます。本書によれば、かつて御釜神社に7つあった御釜のうち、盗賊に盗まれた3口の釜が沈んでいるという伝説があります。

「塩竈村風土記御用書出」（『宮城縣史24』300頁）

によれば「往古一宮御神釜、七ツござ候ところ、その内より三ツ盗み取り候者これ有り、吉ツは当海上にて沈み申候由、其所釜ヶ淵にござ候」とあり、本書と同様の伝承を伝えています。また、「塩釜町方留書」（『塩竈市史・資料篇』83頁）によれば「釜ヶ淵、釜之口とも申し候。この近所、潮干にて釜ヶ淵の通り水色青くあい見え候。不浄の者、船へ乗合い罷り越し候えば船通り申さず候」とあり、干潮でも底が青くみえるほどの深さであること、また不浄の者が船で通行しようとしても通れないといった伝説が記されています。

（沖）

これから先の沖として、尾島沖（諸国の廻船が碇泊する場所）、籬沖、崎山沖があります。



尾島沖に停泊する廻船

小池曲江「塩竈松島図屏風」[塩竈神社蔵]

***崎山沖** 塩竈町を間近に望むこの辺りは、

本書の記述にもあるように魚貝類の宝庫でした。化学洗剤などがなかった当時、生活排水が流れ込む都市近海は、栄養価の高い海水によって魚貝類が豊かに生育していました。

例えば、江戸沖でも同様に魚が豊富に獲れた。これが寿司ネタとされ「江戸前」の魚と呼ばれました。海苔もこうした環境を好み、江戸の浅草海苔もその代表ですが、塩竈も海苔の名産地であります。

~~~~~

今日は、『奥鹽地名集』の中から、特に道に関わるものを再構成しまして、仙台への馬方の道、松島への海道（茶船）の道ということで、当時どの様に認識されていたのかなどについて紹介しました。

（絵・写真出典：当日の配布資料より）



会場の様子

### 【講師プロフィール】

1958年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本史専攻単位取得。早稲田大学文学部助手、日本福祉大学知多半島総合研究所嘱託研究員を経て現職。専門は日本近世史、海運港湾史。主な著書に、『海の道、川の道』（山川出版社、2003）、『日本の時代史17 近代の胎動』（吉川弘文館、2003、共著）他。

出版するにあたっての苦労話など

**(大橋)** 只今ご紹介いただきましたコーディネーターを務める多賀城市史跡案内サークルの大橋です。早速ですが、フォーラムに入っていきたいと思います。



まず、『新釈奥鹽地名集』を出版するにあたっての苦労話をパネラーの方々に伺いたいと思います。それぞれ違った観点から苦労話をお聞きしたいと思います。

最初に高橋幸三郎さんですが、『奥鹽地名集』は当時、江戸時代の言葉で書かれており、それを現代文に訳されていますが、どの様な点に苦労したかお聞きしたいと思います。

**(高橋)** 古文書部会では、未だに悩まされています。だから、苦労しているというより、苦勞しなければ読めないということは仕方ないと思っています。



しかし、私たちは6~7年間、『奥鹽地名集』一筋でやってきた訳ではありません。最初の1年は、『奥鹽地名集』に関する資料を読んだり、また別の様々な資料を読みながら『奥鹽地名集』に戻るといった読み方

を行ってきました。

鈴木三郎治の文章は、非常に丁寧で綺麗に書かれた文章だということが良くわかってきました。そのため、この『奥鹽地名集』が読みにくいということはいえない。これはちゃんと読んでいかなくてはいけないと思っています。読むことに関しては、本当にいつも苦勞しておりましたが、逆に様々な周辺の資料も見ながら徐々に理解が深まってきたという訳です。

結論としては、苦勞したというより地名集に関して、非常にわくわくした時間があり、本当に充実しながら今に向かってきたということです。

**(大橋)** 苦勞話を聞こうと思ったのですが、興味と関心が苦勞を越えていたという感じを受けました。

次に鈴木和栄さんですが、当時の場所を200年越しで見て、現在の場所を特定するには難しいことがあったと思います。普段でも私たちの周りでは、地名が変わったりしているところが沢山ある訳です。昔のいわれていた場所と現在の場所を同定するという視点から鈴木さんにお話いただければと思います。

**(鈴木)** 斎藤先生のご指導のもと、資料を大体読み終わり、それから史料に沿って、実際に現地を歩きましたが、やはり220年も経過しておりますので、当時と地名や様子が全然異なります。特に塩竈の場合は、崖や山が多く平地がないものですから、昔の崖が宅地



になっていたり、家が建っていたりしており、実際に歩いてみると「ここはそういうことなのか」という場所が多くありました。

先ほど、斎藤先生の資料の目次の92ページに沢について記述があります。長沢、かりまた沢、はゞこ沢、泉沢とか、僧正

沢、一の沢など10箇所ほどあります。実際にこの場所を歩いてみましたが、泉沢がある程度でほとんどありません。他の沢は全部宅地になっていたりして昔の面影がない状況でした。

次に、堤については、泉沢堤、丸山堤とか、母子沢堤、はなたて堤など15箇所ありますが、堤も沢と同様にほとんどありません。しかし、泉沢堤は、貯水池ということで、機能を少しは果たしているのではないかと思う形にはなっています。このように実際に現地に行ってみると昔の記録と現在の地名の場所が大分変わっているというのが現況です。

最後に130ページに“むしろか瀧”という瀧がありますが、塩竈で瀧を見たことはありません。昔は小松崎の所にありました。今は、道路の側になっていて「ここは瀧だったんだな」と思えるような印象の場所です。

実際に現地に行ってみて感じたことは、220年経過しておりますが、我々現代人はこの鈴木三郎治が苦勞して書いた本を無視した生活をしているのではないかという感じを受けました。

**(大橋)** 確かに堤や沢、岬が開発等によりなくなってきていることは、非常に残念であり、過去の自然遺産などを残せるものは残していきたいと思いました。

次に三浦一泰さん、実際に『奥鹽地名集』を訳すにあたり、地元の古老といわれる人達から情報を集めたり、話しを聞いたりされたと思いますが、その視点から伺いたいと思います。

**(三浦)** 私は岩蔵部会長もしているということで、石のお話を例にしたいと思います。



先ほど、斎藤先生のお話にありました名石の1つに“おつむきの石”というのがありました。この『奥鹽地名集』を読みますと「御裏下馬之所、松木有之所の石」と記載されています。先ず「御裏下馬之所」について考えますと、仙石線に下馬駅が

ありますのでその松や石があるところ、それから塩釜神社の裏坂を探してみましたが、それらしいものは全然見つかりませんでした。

そこで、ほぼ同時代に書かれた『奥羽名所図会』というのがあり、これを細かく見ていきますと塩釜神社の御神馬舎の前に裏下馬と書いてありました。「これだ!」ということで、早速行ってみましたが、それらしいものは何もありませんでした。

更に、私は絵はがきを集めており、その絵はがきをスキャンしてパソコンに取り込み、拡大して何が映っているか見ていたところ、御神馬舎付近の鳥居のところに大きな石が映っている絵はがきがありました。私は「これだ」と思いました。頭のことを私たちは“おつむ”といいますが、“おつむ”を辞書で調べますと“おつむり”という記載があり、おつむきの石という名前ですから、恐らくこれではないかと思えます。また、その絵はがきを調べてみますと明治33年に作られた石柱も一緒に映っており、それが明治33年以降の絵はがきだということがわかりました。

しかし、このおつむきの石に関してある時期を境に絵はがきに全く映らなくなります。その時期が昭和2年の絵はがきでした。この間に同じ場所で大きな石燈籠が対で建てられたということがわかりました。恐らく、大正頃のこの燈籠設置によりおつむきの石であったろうものが撤去されてしまったと考えたところです。当時は、歴史的なことがいい伝えられることもなく、撤去されてしまったのではないかと考えられます。

今回の『新釈奥鹽地名集』は、できるだけわかり易いように、古絵図や絵はがき等を使って、ビジュアルに編集しております。また、地域の古老の方に訪ねて、先ほどの3つ釜のうち1つがどこにあるかわかったという例もございます。

そういった意味で、『奥鹽地名集』に「地域について詳しい方を訪ね、様々な資料等を調べて書き残した物であり、大切にしてほしい。記載している内容に誤りがあれば改めてほしい」と記載されております。

私どもは、そういったことを著した鈴木三郎治の意志を受け継ぎ、また次の世代に伝えていくことが大切ではないかと思ひ活動をしておりました。

**(大橋)** おつむきの石を例に、絵はがきで捉えるという視点からお話いただきました。

私たち個人々が持っている歴史的資料を1人でも多く残しておくことにより、100年後でも誰かがまとめる時に非常に有効になるのではないかと私は感じております。

3人の方から『新釈奥鹽地名集』出版に当たっての苦労話を伺いましたが、これらについて斎藤先生よりコメント、感想を伺いたいと思います。

**(斎藤)** いつも一緒に活動をしているメンバーの思いを本日改めて聞かせてもらいましたが、3人の話を聞き、改めて気になったことがあります。

一つは、たった一点、記録されたものが残っているところからわかることが凄くあって、もしこれが火事でなくなっていたら恐らく、ここに小さな滝があったとか、昔そういう石碑がぽつんとあって、何と呼ばれていたかなど、町の小さな情報が全部失われていたのだらうなと感じました。

ところが、これが残っていたので、それを手がかりに現場に行き、どうなっているのかということを探し歩いてみた訳です。しかし、探してみるとそれは無い。けれども史料からは昔あったことになるのかなということから、当然その辺りのおじいさん達に、「昔こら辺に石碑なかった」と聞いて回ることになります。すると「あった」とか、「それはこういう石だった」とかという話とかを聞くことができる。また「昔の写真とかはないですか」とか「知っている人いませんか」とかといって一つひとつ追求し、確認していくことになります。結局確認出来なくてわからなかったものも沢山残ったけれども、それはわからないということがハッキリしました。しかし、不明だった箇所も結構わかってきます。また、仲間と共に向かい合って「どうなっているんだらう」と議論すると次の週の部会までに必ず誰かが行ってきたりして、「実はあったぞ」とわくわくしながら報告してくれる。そうやって一つひとつ発見する訳です。発見といっても「こうだって・こう

だった」と解明していくということですよ。

そうすると、これまで平面的に見えていたことが、時の流れを加えて見ていくと凄く立体的になり、その地域が出来てきた時間というのを踏まえて、豊かなものを語り、趣を添えてくるというか、そういう世界が出てくる。タイムマシンじゃないですが、それに乗るような感覚で自分たちが史料を調べ、わからなかったことを理解するため、町の至る所を歩いてみました。この様な喜びを体験しながらやっていくのかなと思います。

もう一つは、高橋さんや三浦さんが言ったように、私たちは、始めの一つのテキストを読んできました。そして「こう書いてある」と読み解くことができました。それを元に現場で歩いて見たりすると、「なかったな。では他の文献はどうだろうか。」ということで、また違ったテキスト、文献を読んでいくという作業にどんどん入っていきます。すると完全に違うことが書いてあったりします。

典型的な例は、降臨石と腰掛け石についてです。ある文献は降臨石が腰掛け石とされ、またある文献は腰掛け石が降臨石とされており、ごっちゃになっています。だから、当時の江戸時代でも既にはっきりしなくなっているというか、呼び方が入れ替わっていたとか、別の所にある違う石であったりして、「どっちがどっちなんだらうな」ということで、更に別の本には何と書いてあるのだらうと、当時の史料を手当たり次第読みあさるといことを私たちはやってきました。

こういうことをやりながら見えてくるのが、やはり楽しみというか、こうして町の歴史をしっかりと復元していくこと、その街角のさりげない何かを復興することに意味がある。

例えば、街の角にあった小さな石や家の前にぽつんと置いてある石が下駄の歯から雪を落とすためのほろき石だったりとする訳です。また、街角のなんのいわれもない石も馬つなぎ石で、ずっと流れ伝えてきた石だったのです。そうするとその石も重要になってくる訳で、勝手に邪魔だからその辺に持っていこうとか、捨ててしまおうとはいかないんじゃないの、どれだけ多くの方がこの石に下駄をぶつけてきたのかと、この石も大変に歴史を持っている訳です。

ということは、それがその町の本物の歴史であり、遺産である訳なので、まちおこしの時にとっても役にたつのではないかと思います。現に、どこから持ってきたものではなくて、昔からそこにある石、本物の石ですから、その町が馬で賑わっていたとか、雪が沢山降った、そしてみんな下駄で歩いていただとかそういった時代があったということがわかる訳で、そういう歴史的なものをこれから大事にしていかなければならないと改めて思い知らされるもので、まちおこしとはこういう所からやっていくことも、とても良いのではないかと思います。

それがこの『奥鹽地名集』を読みながら同時に感じたことで、皆さんと共有できたのかなと思っています。

## 新しく得られた知見

**(大橋)** それでは次に、『奥鹽地名集』を現代語に

解釈し刊行する中での思いや、新しく得られた知見について、3人別々の視点でお願いします。

まずは三浦さん、筆者である鈴木三郎治に関してお話を伺いたいのですが。

**(三浦)** 鈴木三郎治の人物像については、基調講演で詳しいお話がありました。

私から『新釈奥鹽地名集』の4ページを読み上げますので聞いてください。最初の「是」は塩竈のことです。『是ハ、流石に名高き名所なれハ、おろかなる筆に、およハすといえとも、此浦に住馴て、朝夕眺れとも、見る度々に其節々を頭ハし、春ハめたち(芽吹)、秋ハ松蔭の月、紅葉の風情、感ずるに絶えたり、賤山かつの身にさへ、あかぬ(飽きることのない)眺めと思ひハ、其所に住ながら、燈臺元くらくして、鍬鎌のわざのミ、何の心もなく、明し暮さんも本意なれハ、およハすながら、見る人のわらひもかへり見ず、興に餘り、止ミかたくして書とゝむ』と著者は冒頭に書いています。彼の地域に対する強い郷土愛、そして、それを後世の者に何としてでも伝えたいという気持ちが、素晴らしい地誌を表す原動力になっていたのではないかと思っています。このことを皆さんにお伝えしたいと思っていました。

**(大橋)** 非常に良いお話でした。郷土愛というのがあったからこそ、立派な地誌が書き残されたのでしょう。

続いて、鈴木さん。今まで知らなかった新しい場所の知見についてはいかがでしょうか。

**(鈴木)** 私は今まで勘違いしていた場所がありました。塩竈神社の裏坂を登り、右に行くと法蓮寺というお寺の跡があります。昭和40年代まで料亭「勝画楼」だったので、私の先入観も同じだったのですが、『奥鹽地名集』を見ると、これは法蓮寺の書院ということがわかったのです。法蓮寺のお寺の格は、松島の瑞巖寺と同じく、仙台藩の御一門格17ヶ寺のお寺の1つだったのです。その当時は塩竈神社を管理していた別当寺であったのですが、神社とお寺との仲が悪く、明治5年の廃仏毀釈で真っ先に廃寺になりました。

私にすれば、料亭の建物だったのですが、実は鎌倉中期から長く続く、12の脇院があった大きなお寺だったのです。

そう考えると、塩竈様と法蓮寺との間にいろいろな問題があったにしても、なぜ廃仏になって、今日に至ったのかということを見ると、悔しいような、寂しいような感じがします。

現在「勝画楼」は、塩竈神社の所有になっていますが、神社にすれば、再建又は取壊をしようとかいう、はっきりとした意識(方向付け)はありません。できればもう一度再建し、あそこからの塩竈の浦を眺めることによって、違う形の塩竈の港が見えるのではないかという勝手な希望を持っている次第です。

**(大橋)** 明治という大きな時代の流れの中、廃仏毀釈により廃寺となった、塩竈神社の別当寺であった法蓮寺について、お話を伺うことができ大変に良かったと思います。

次に、高橋さんから『新釈奥鹽地名集』第二部現代語訳と解説の中で、大量の関連文献を調べ、現地を調べたり、人に聞いたりして、写真を載せ、大変にわか

り易くまとめていますが、この調査等の中での知見、思いなどを話していただければと思います。

**(高橋)** 本日、基調講演の中で「七曲り水戸」というのがありました。江戸時代に描かれた塩竈の河岸からの海の絵図には、必ずというほど「滯標(みおつくし)」の風景が出てくるのですが、「七曲り水戸」というのは、そのくらいのイメージしかありませんでした。

これを強く意識したのは、NPOに入る前のことです。齋藤先生は「塩竈学」という講座を続けていましたが、丹六園さんの膨大な古文書を読み解く講義の中で、明治5年の嘆願書の話に非常に驚きました。廻船問屋などで廃業した方も随分といたようで「何とか水戸払いをしてほしい」という、かなりの必死の嘆願書だったのです。この嘆願書を見ますと、実際に「七曲り水戸」はどのように使われていたのか、そして、それが5年も10年も浚わなければどうなるのか、そのくらい塩竈にとって重要な水戸だったということを確認しました。

「七曲り水戸」については、いろいろなところに書かれているのですが、そこまではっきりと書かれたものはあまり見たことがないので、丹六園の古文書は本当に貴重な文書だったのだと感じました。

それで、そのような文書の大切さというものを踏まえ、このNPOに入りました。NPOということで、神社さん等の協力も得られ絵図等が集めやすい恵まれた環境にあったことで、明治の頃の図など、多くの史料が『新釈奥鹽地名集』に詰められています。

まだ謎が残っているのが、御腰かけ石、四方跡(よもせき)公園の辺りと思っており、これはこれからの楽しみでもあり、もし、その謎が解けた暁には、『決定版 奥鹽地名集』が出せるかもしれないと思っています。

## 大震災の復興に関する将来へアドバイス

**(大橋)** 非常に発展的な話が聞かれてすごく良かったなと思いました。

最後に、本日のフォーラムのテーマでもある今回の大震災復興に関して、将来へのアドバイスをお願いします。高橋さん、歴史的建造物の保存・活用で活躍されている「NPOしほがま」として、このような視点からいかがでしょうか。

**(高橋)** 数年前、多賀城の慈雲寺で向拝(法蓮寺から移築されたもの)が壊されるというので、「それはもったいない」と塩竈で引き取り、現在、浦霞の佐浦酒造前にあります。私たちは、そんなにお金もあるわけではないので、向拝を運ぶのもなかなか大変でした。今回の震災では酒蔵がかなり壊れたのですが、この向拝だけは全く壊れずそのまま残りました。

一方で、私たちが塩竈の風景として非常に良いなと思っている宮町の二軒茶屋には、今から100年ぐらい前の建物が何軒かある通りがありますが、震災でそのほとんどの建物が全壊扱いを受け、半数程度が解体されています。本当は「残してください」と言いたいの



ですが、費用や所有者のご苦勞などを考えると簡単には言えず、唇を噛む思いがしています。

また、今回の震災で被災を受けた「亀井邸」修復は、最初に思った以上に費用がかかるということで、塩竈市を上げて取り組む姿勢のようです。6月頃に齋藤先生からの提案があり、「何とか民間主体でやりたい」という思いを私達も共有して、市は市として、やっぱり私達のできる範囲のことを何とかやりたいという思いで、今やり始めた所です。微力で、やれることしかできないかもしれませんが、頑張っていきたいと思っています。

地名だけではなく残っているものを大事にして、次の時代に伝えていくことが鈴木三郎治の思いでもあり、私達の仕事だと思っていますので、今後とも皆様のご協力やご支援をお願いします。

**(大橋)** 文化的な遺産を残していく重要性が良くわかりました。

ここで、このテーマに関して、私から2、3点話させていただきますと思います。

今度の大地震が、今から約1,000年前に起きたいわゆる“貞観の大地震”以来であるということは、マスコミ等で広く伝えられていますのでご存知のことと思いますが、改めて当時の、即ち平安時代の時の政府がどの様に対応したのかを知ることも必要だと思います。

869年、貞観11年5月26日の夜間に大地震が発生しました(マグニチュード8.3以上とみられ、今回の大地震は9.0)。家屋の倒壊や地割れの発生、また牛馬は驚き走り回る様な状況で、さらに国府多賀城では城郭・倉庫・門・築地塀などが倒れ、さらに城下に押し寄せた津波により1,000人が溺死するなど壊滅的な被害を受けました。これは901年に完成した「日本三代実録」という歴史書に生々しく記述されています。

当時の陸奥国は、今の福島県、宮城県、岩手県の一部を含む訳ですが、国府多賀城以外に具体的にどの様な被害があったのかは記述されていません。しかし、広い範囲で甚大な被害が出たことは容易に想像されます。

そして、より重要なことは、時の政府(天皇は清和天皇で、藤原氏中心の摂関政治が行われていた時代)の対応です。すなわち、同じ年の9月7日には、陸奥国に「検陸奥国地震使」を派遣し、被害状況の調査にあたり、10月13日には、天皇の詔が出され、津波や地震の被害があった陸奥国に対し、祖・庸の税金を免除し、自活できない者には食料を支給しています。また、12月8日には、刈田嶺神社の位階をあげ、地震からの復興を祈願しています。さらに、翌年の9月15日には、「陸奥国修理府」を設置し、古代朝鮮新羅の瓦職人を居住させ多賀城などの復興に当たらせています。

多賀城と京都の間は東山道を駅馬で急いでも4~5日はかかった時代に、この様にすばやい対応を取っているのです。

付け加えさせて貰えば、若き菅原道真が受験した貞観12年の方略試(官吏登用試験)には「地震を弁ぜよ」という問題があったほど地震に対する朝廷の動揺が大きかったといわれています。

今回の大地震は、想定外ともいわれていますが、せめて復興には政府を先頭に日本全体が一体となって貫

いたいと願うのはむしろですが、復興の具体化にあたり、画一的ではなく、その地域の歴史や文化などを踏まえた復興となるよう、市民の我々が発言していく必要があるものと思います。

## まとめ

**(大橋)** それでは、最後に齋藤先生からまとめをお願いいたします。

**(齋藤)** 先ず、最初に強調したいことは、『奥鹽地名集』そのものが地元の人の手によって作られていたという本で、『新釈奥鹽地名集』についても地元の人が作ったからできたということです。

『新釈奥鹽地名集』第一部の写真版と翻刻及び第二部の現代語訳の部分は、よそ者でもできる。しかし、第二部の解説は、実質16人のメンバーが、それがどうなっているか、写真を自分達で撮り、また聞き込みも親戚などネットワークをフルに活用して、歩いて調べたからできたと思っており、これはよそ者ではできない。まちおこしの素材というか、町の魅力の発見、それを地元の人がやっていくとこれだけのすごいことができます。

私の役割は、そのやり方や地元の人が陥り易い1つの罠である「つい地元を愛するあまり誇大にとか、独善に陥りやすいところ」は、全国的な目から見て、それはやり過ぎと言ったりすることです。

2つ目に強調したいことは、『奥鹽地名集』を読んで思ったこととして、「謙虚でなければならない」ということです。先ほど三浦さんの紹介した中に「賤(しず)山かつの身(賤しき田舎暮らしの我が身)」という自分を卑下したものがあっていますが、卑下ではなくあれは謙虚さであり、この姿勢はこの本の全体に流れていることをすごく感じています。歴史の事実を後世の人に書き改めてもらいたいともいっている。これは一つの考え方、私の聞いたことなので、間違っているかもしれませんがという様なことが書いてあったりする訳で、その謙虚さが大事だと思います。

関連して、もう一つ紹介します。よく話題になっていることとして、源融がこの土地を訪れているということに関してこの本は書いています。「傳て曰、淳和帝の御猶子河原左大臣融公、この浦の眺望を聞き召およハせ給ひ、都六条河原に、しほ屋の景色を移させられ、御遊覧有しもむべなるかな(淳和帝の猶子(兄弟の子)の左大臣融公が、この村の眺望を都で聞き及び給われて、この景色を六条河原に移させられて、楽しまれたのも当然なぐらいここは素晴らしい)と書いています。これは、その様に聞いているが、それだけでも素晴らしいことといっています。

ここが最近では、融がここまでやってきていたと唱えている人もいます。学説として研究する必要がありますけど、一般的な学説としては、按察使というこの地の官職に任命されたというのは事実ですが、融は親王でもあり、一時は天皇候補にもなった身分なので来ずに代理を派遣してくる程度のことだったのではないかとされている。

しかし、やっぱり来て欲しいという思いがどんどん強くなるし、いや来たんだとなります。塩釜には融ヶ丘という地名があり、そこはいつからいわれているの

か研究する必要がありますが、そこは融が屋敷を構えた跡であると石碑も造られています。ということが史実をやっていくときに常に問題になっていく。

また、街道ということになると、色々な人が行き交う、当然行き交ったのも事実です。有名な人も来だし、そのところで史実と伝説そこらへんは切り分けていく。来てほしいと思っても、来たのが事実かどうかは、リアルに厳しく考えていかないといけない。

また、まちおこしに取り組む人達にとっては、義経伝説とか小野小町伝説とか、それをどこまで伝説として持ち上げながら、伝説としてはここまでだと切り分けをしていくか。これは、とても大事な問題だと思えます。どう史実と伝説ととらえていくかというのが、永遠の課題です。

そういう意味では、この『奥鹽地名集』の謙虚さはやっぱり素晴らしい。それを我々も学ぶべきだろうということで、常に古文書部会の中では意識しています。

最後になりますが、今回の大震災で、こういった文化財が大量に無くなっている。結局、建物や景観だけではなくて、古文書も目に見えない形で大量に破棄されている。実際には、手のほどこしようがないものもあるのですが、塩釜では、「ちょっと前に来ればあったのに、古文書だと思っけど捨てた」とこの間も言われた。どんなに泥だらけになっても今は復元できるので、ワンタッチの差で出会えていれば保存措置をとり、戻せることができたと思うのです。

それを我々が引き取って、泥を排除して、きれいに

したりする作業を「NPO 法人宮城歴史資料保存ネットワーク」で、東北大の平川先生や私も一緒にやっています。

これも私達がただ騒いでいるだけではなくて、市民とか今日参加の皆さんが「そういうものは大事でちょっとだけ待って」と広めていただくと残るものは残ることになります。

震災というのは本当に大変なことでありますけれども、文化というのは非常にデリケートなものなので意識的に手をくたさないことによってどんどん無くなってしまわないかということをおそれています。

なぜ残さないかといけないかという、先ほども話したとおりですが、画一的な町になることを防ぐため、そういう物を残していくと、その地域が持ってきた独特な個性という地域の文化に役立つ資料となるということです。

今回『奥鹽地名集』が一つ残されていたことから、それがタイムカプセルになって見えてきたということの意味を皆さんに共有していただくことによって、第2、第3の『奥鹽地名集』の様なものを私達も頑張っで残したいと思うのです。

そういったことも一緒に感じていただければというのが私の願いで、大震災と『奥鹽地名集』ということでは、そういうことも我々に突きつけられているのではないかと考えております。

(大橋) 皆さんありがとうございました。

## [報告]

## 瑞巖寺「平成の大修理」の概況

おくの細道松島海道代表 京野英一

10月2日午前開催された瑞巖寺本堂大改修の現地説明会に参加したので、主な点を報告いたします。

まず、畳1枚の半分、それを四分の一したもの、すなわち一尺五寸の正方形、厚さが五寸(45cm×45cm、厚さ15cm)の凝灰岩を菱形に並べた四半敷(しはんじき)という基礎の部分が発見されたということです。

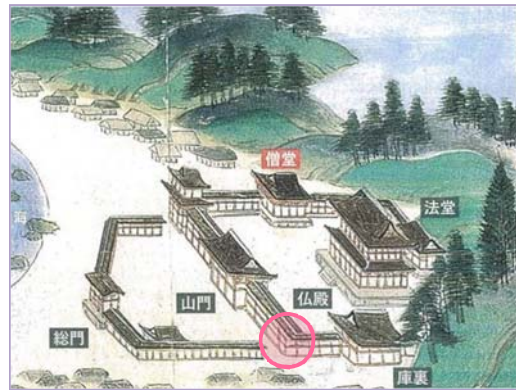


この四半敷が造られたのは、正元元年1259年円福寺の工事のものであることがわかった。円福寺は、瑞巖寺の前身の臨済宗のお寺で、鎌倉の建長寺と創建がほぼ同じです。その時の基壇、今でいえば基礎です。45cmの石を敷き詰めて、その上に基礎をつくってお寺を建てた。これは、東北では瑞巖寺が初めてだということで、関西・京都近辺の学者さんが連日調査に来ているそうです。

その次、ほぼ円福寺と瑞巖寺本堂の中心点が同じ位置であったということで、「遊行上人縁起絵」にある円福寺の法堂と瑞巖寺の本堂(伊達家の位牌が祀っている所)の位置が等しいということがわかったということです。

つまり、円福寺以前は、慈覚大師が天台宗延福寺を建立しましたが、その位置は未だに明確になっていませんでした。しかし、鎌倉幕府祈願寺となった臨済宗円福寺もこれまで位置も不明であったが、今回の発掘調査で「瑞巖寺の本堂の位置と等しい位置にあったことがわかった」という大発見なのです。

なお、『遊行上人縁起絵』(下図)は円福寺の描かれた現在唯一の絵図です。



※宝物館の調査で発見されたL字の基壇は、図中の丸枠の部分と考えられる。

結果として、今回の調査で非常に大切なことがわかったので、調査期間の予定を延ばして、更に詳しく調べていくということでした。

(写真・絵図出典：瑞巖寺埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料より)

## 参加状況及び参加者アンケート結果

### 1. 参加者内訳

参加者の内訳は、下表のとおりで、第Ⅰ部 68名、第Ⅱ部 46名の方々に参加いただきました。

| 参加者内訳         | 参加者数 | 地区別内訳 |     |     |     |     |        | 備考 |
|---------------|------|-------|-----|-----|-----|-----|--------|----|
|               |      | 多賀城市  | 塩竈市 | 松島町 | 仙台市 | その他 | 不明(当日) |    |
| 第Ⅰ部 フォーラム     | 68   | 8     | 14  | 10  | 28  | 6   | 2      |    |
| 第Ⅱ部 海道談義      | 46   | 3     | 10  | 6   | 24  | 3   | 0      |    |
| 参加者計          | 73   | 8     | 14  | 10  | 33  | 6   | 2      |    |
| 合計(第Ⅰ部・第Ⅱ部延べ) | 114  |       |     |     |     |     |        |    |

※1) 参加者計はダブルカウントなし。

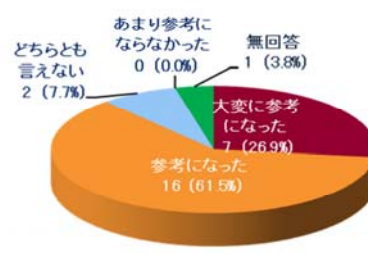
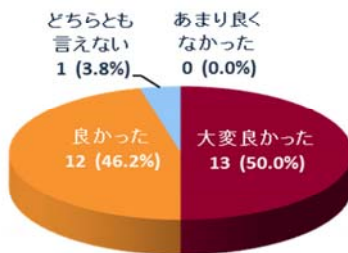
### 2. 参加者アンケート結果

1) 選択項目の回答は下図のとおりです。

参加者の多くは、大変良かった・良かった、大変参考になった・参考になったと答えています。

問2 「基調鼎談」の内容はいかがでしたか？

問3 「フォーラム」の内容はいかがでしたか？



※ 回収数/27 回収率/対総参加者：39.7%

2) 自由記述の主なものは、下記のとおりです。

#### [問2] 「基調講演」の内容について

この地名集を知らなかった。各地にこのようなものが数多く埋もれているのかも、記録を残すことの大切さを痛感。／先人の知恵を私たちの生活に活かすためにつかみたい。そうゆう気持ちで話しをしていることに共感。／史実と伝説の捉え方。郷土愛に極端に走らず、独善的にならず、謙虚さを失わず、震災で失われそうな地域の文化財を守る。とても大切な新しい気づきに。

地域の方々が一緒に取り組んだ活動、地誌が残されたこと。どれも素晴らしい事だと思う。／先生には、塩竈の歴史、文化について、本当に学ばせて頂いて、塩竈にはなくてはならない方だと思う。NPOみなとしほがまが果たしている役割の大きさを更に次世代に伝えて頂きたいと思う。／出版に6年間も地道に努力した事に深く感銘。内容構成も素晴らしい。／1つの古文書を地域中心にここまで掘り下げ究明したことは素晴らしい。

地元塩竈に長年住んでいても知らない事をたくさん教えて頂いた、奥鹽地名集を読み続けて勉強します。／配布資料を元に分かりやすい内容だ。家に帰っても復習出来そう。／地元の歴史を知ることで、立体的に理解する必要性を感じた。／現在の塩竈しか分からなかったが、古い塩竈のイメージが湧いた。

#### [問3] 「フォーラム」の内容について

町おこしのためとは言え、1つひとつ苦労し検証を行い、積上げた結果であり非常に参考になった。／地名集は大変素晴らしい本。地域おこしの原点のバイブルに値するものと感心。努力に感謝。／地元の歴史を知りたい、熱意が伝わる。地元学に取り組む姿勢に感銘。／大変感謝。係わったメンバーの方々の努力と能力に感謝。

この地誌を読み解くことは、塩竈の地を知っていくことの経過と同じになっていることを強く感じた。歴史の重荷を背負っている場所や地名やものなどがなんと無造作に壊されてきたことか。／歴史があり現在がある。これからの人達に正確に伝承して行ければと思う。／歴史を勉強する楽しみ方、方法を教えて貰った様に思う。

#### [問4・5] 「フォーラム」に参加した感想・震災復興について、ご意見など

各地域の団体が共に連携して、フォーラム開催したこと。地誌がまちづくりに活かせること。好事例として大変参考に。／震災の歴史も古代より現在に語り継がれ、後世に対しての注意を促している。日本は島国、常に大自然の中に生きていこうと思う。復興に係わるこうしたフォーラムを期待。

古文書の歴史と奥深さを学ぶ事が出来た。長い間の調査に感謝。自分なりに活かしたい。／伝える大切さを痛感。一市民の記録が、後々、新たな発見に繋がるのかも…。／文化財を守って行く。生かされている私達が体験、経験した事を文章にして残していく事が大切、大事。

耐震性建築が叫ばれる中、歴史的建造物の残し方を改めて考えなければいけない。／文化財に関しては、街上げでも修正していくべきだと思う。微力だが協力したい。／文化財修復を予算化必要。現状は二の次になっている。大震災・大津波は、日本の歴史に加えなくてはならない大きな出来事、失われた命、また多くの人間以外の命もまた忘れてはならない事を。自然に向き合っていくことがこの地球上に生きる限り心にとめておくことと思う。／便利になった現在だが、原点に戻って、江戸時代の先人達の生活を参考にしていきたい。

会場も、話しも良かった。／初めて参加。聴講者は、全員真剣に聞き入り、素晴らしいフォーラムでした。

## みやぎ街道交流会 “震災復興支援フォーラム” 写真ダイジェスト



陽徳院の全景



陽徳院の玄関



陽徳院から山門を望む



陽徳院仏前に向かい黙禱



白鳥会長のあいさつ



基調講演の様子



会場の様子



団体の紹介



フォーラムの出演者



瑞巖寺「平成の大修理」の報告



観月舟(第三仁王丸)に乗船



海道談義の乾杯!



船上デッキで観月



森祐子さんの昔話



『おくの細道』朗読



船上からの夜景



旧暦9月13日の栗名月

みやぎ街道交流会

〒980-0014

仙台市青葉区本町1丁目13-32 オーロラビル2F

TEL 022-722-3380 FAX 022-722-3381

Email miyagi-kaidou@auone.jp

URL <http://www.tohoku-kaido.com/miyagi/>